

8 特別の教科 道徳の指導

1 目標

自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

2 努力点

- ① 自分の思いを表現し、集団での関わり合いの中で、互いの考えや意見を認め合い、磨き合い、高め合い、道徳的実践力を養うことができる学習を心がける。
- ② 児童の発見・つぶやき・表現などの授業とのかかわりを知り、子どもの確かな実態把握につとめる。
- ③ 意欲を呼びおこすための指導過程の工夫をする。

3 計画の概要

- ① 「中心発問」と「価値の一般化」の2本柱を設け、授業を構成する。
- ② 発達段階に応じてペア・グループ学習、スクランブル交流等、学習形態の工夫を図る。
- ③ 道徳的実践力を高めるために道徳科を核とした総合単元的な道徳学習の研究につとめる。
 - ・特別活動や総合的な学習において体験的な学習と道徳科の学習を関連づける。
 - ・家庭や地域社会との連携を図り、ゲストティーチャーを招くなどの工夫をする。
 - ・他教科指導との関連をはかる。
- ④ 副読本「心のとびら」の活用を工夫する。

心のとびら（学年別単元一覧）

学年	単元名	
4年生	・卓球は四人まで	p. 12
	・ひどいよね	p. 16
	・水の匠 井澤弥惣兵衛	p. 26
	・伝える匠の技—紀州漆器—	p. 70
	・石に魂をこめる—石屋忠兵衛—	p. 76
5年生	・なしの実	p. 8
	・クヌッセン機関長	p. 20
	・知らない間の出来事	p. 44
	・つなぎ合わせたメダル	p. 50
	・すべてのワクチンの開発に—小山肆成	p. 60
6年生	・伝えたい願い—画家・彫刻家 保田龍門—	p. 2
	・人間をつくる道—剣道—	p. 32
	・最後のおくり物	P. 38
	・その思いを受け継いで	p. 54
	・にぎりしめた手	p. 66
	・ベンチのおじいさん	別資料

指導重点項目（年間計画の中で重点的に扱う内容）

項目 学年	内容 A. 主として自分自身に関すること	B. 主として人とのか かわりに関すること	C. 主として集団や社会とのか かわりに関すること	D. 主として生命や自 然、崇高なものとのか かわりに関すること
1年	A- (3) 節度・節制	B- (6) 親切・思いやり	C- (10) 規則の尊重	D- (17) 生命の尊さ
2年	A- (3) 節度・節制	B- (6) 親切・思いやり	C- (10) 規則の尊重	D- (17) 生命の尊さ
3年	A- (1) 善悪の判断・自律・自由と責任	B- (6) 親切・思いやり	C- (12) 公正・公平・社会主義	D- (18) 生命の尊さ
4年	A- (1) 善悪の判断・自律・自由と責任	B- (6) 親切・思いやり	C- (12) 公正・公平・社会主義	D- (18) 生命の尊さ
5年	A- (1) 善悪の判断・自律・自由と責任	B- (11) 相互理解・寛容	C- (13) 公正・公平・社会正義	D- (19) 生命の尊さ
6年	A- (1) 善悪の判断・自律・自由と責任	B- (11) 相互理解・寛容	C- (13) 公正・公平・社会正義	D- (19) 生命の尊さ

(3) 研究の方法と内容

①道徳の指導

道徳科は、子ども一人一人が教材に積極的にかかわり、道徳的価値をより深く追求し、自己を見つめ、豊かな心を育てる時間である。

授業では、教師が価値を押しつけるのではなく、子どもにその価値を気づかせ、自分の思いを表現し、集団での関わり合いの中で、互いの考えや意見を認め合い、磨き合い、高め合い、道徳的実践力を養うことができるような学習にしたいと願っている。

②子どもの姿をとらえる

子ども一人一人のもつよさを見つめ、可能性を見出し、伸ばしていくことを基本的な考えにおいて、まず子ども一人一人の道徳性の実態を知ることが大切である。

実態をとらえるためには、授業や諸活動や休み時間の様子から、また観察・日記・作文などから子どもを多面的にとらえ参考にする。道徳科では、子どもたちの発見・つぶやき・表現などの授業とのかかわりを知り、より確かな実態把握につとめる。

③教材の分析・吟味をする

- ・指導のねらいを明確にする。
- ・「中心発問」や「価値の一般化」の場面をしっかりとらえる。
- ・子どもの反応を十分予想する。
- ・視聴覚教材の利用、役割演技、動作化の工夫、書くことの活用、板書などをどの場面でどう生かすかを考える。

④意欲を呼び起こす指導方法の工夫

◎指導過程について

児童の課題意識を重視し、価値観を高めるために基本的な指導過程を次のように考える。

段階	学習活動	指導上の留意点
導入	○学習内容を知る。	ねらいへの動機づけや方向づけをする。 ・生活経験から入る。 ・教材から入る。 ・価値から入る。
展開	○範読を聞く。 中心発問 ○道徳的価値について考える。 ※その教材で最も考えさせたいところ。 価値の一般化 ○自分ごととして考える。 ※児童の生活経験や価値観がでるところ。	・登場人物になりきる等、その気持ちが考えられるように教材の提示や指導方法を工夫する。 ・自分の問題として意識しながら考えられるようにする。 ・補助発問や切り返し発問をして、話合いに深まりを持たせられるようにする。 ・互いの考えや意見を認め合い、自己を高めていけるように工夫する。 ・登場人物の考え方、感じ方を自ら追求できるようにする。 ・道徳的価値を自分とのかかわりで考えられるような発問を組み込む。 ・自分のこととして価値を自覚させる。
終末	○振り返りをする。 ・教師の説話を聞く。 ・考えや感想を書く。 など	・実践への意欲づけをする。

◎価値の一般化とは

- ・資料を通しての話合いの深まりを受けて、自分自身、自分たちの問題として広げて考えること。特定の場面での価値の把握に止めず、自分を見る目を深め、道徳的価値の主體的な自覚を図ること。（「教師のための道徳ノート『道徳用語集』より」
- ・資料を通して追求、把握された道徳的価値を現在および将来にわたる児童の生活経験と結びつくものとして、主體的に自覚させる必要があるものである。つまり、ねらいとしている道徳的価値が特殊な事象にだけ妥当する価値としてではなく、多くの事象にも適用させるべき共通の価値としてとらえさせ

ることが必要となってくる。このための手立てが道徳的価値の一般化である。（「文部省小学校道徳教育の実践と考察4」より）

◎話し合うことについて

より主体的に考え、対話的な話し合い活動を行うために、ペアやグループ活動を取り入れるようにする。その中で、自分の本音を語ったり、相手の意見を聞いたがったりするような組み立てを工夫する。

◎ゆさぶりの発問について

ア. お互いの見方や考え方を対立させることによって、自分の本音を出さざるを得なくなったり、反対に本音を出し始めると対立が生まれてきたりする。また、自分の当面している場面の中のいろいろな事実と真剣に向き合うことから学習意欲もうまれると言える。

イ. ゆさぶりの発問によって、子どもの最初もっていた考えを一步進めて、より深く考え思考をひろげ、自分の立場や見方を変えることにつながっていくと考える。

このような授業を重ねることによって、子どもには次のようなことができるようになることが期待される。

- ・柔軟で多様な見方ができる。
- ・見る立場によって見え方が異なってくるのが分かる。
- ・自分の考えを反省することができる。
- ・友達の考えを理解する力が育つ。
- ・目の前の現実性だけでなく、可能性を考える力が育つ。
- ・可能性を考えることに対する興味も育てられる。

◎書くことについて

本稿では、道徳科に「書く」活動を取り入れている。自己をみつめ、価値の内面的な自覚を促すためにかくということは大切であると考え。書くということを取り入れることにより、次のようなことが期待される。

- ・一人一人の子どもの思いを知り、次の学習につなげることができる。
- ・授業の中で書かせることにより、どの子にも一斉に立ち止まらせることができる。
- ・子どもの心の変容がわかる。
- ・大人も子どもも授業をふりかえることができる。

◎評価について

評価は、子どもの様子を見取りから出発する。道徳科においては、学習の様子、発言の内容、道徳ノートの内容（記述したもの）、話し合いへの参加の構え、自分について考える姿勢等に関して評価を進めるように努める。それらを通して、教師の指導計画や指導方法の評価、子どもの自己評価につなげ、自己を見る目を豊かにしたい。